

カトリック 仙台教区報

2007年1月7日 No.173

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

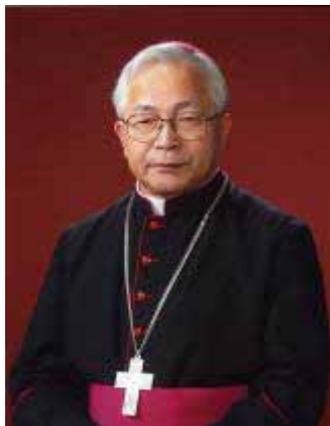
URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

2007年 年頭書簡 光の子として歩もう

仙台司教 マルチノ 平賀 徹夫

神の深いあわれみにより、夜明けの太陽はわたしたちに
臨み、やみと死の陰にある人を照らし、わたしたちの歩み
を平和に導く。

—— 教会の祈り・ザカリヤの賛歌（ルカ1章78～79節）——



仙台教区の皆様、主のご降誕の
お慶びを申し上げます、新年のご挨拶
を申し上げます。

昨年3月の司教叙階にあたり
ましては、教区の皆様は心をこめ
て祝ってください、教区が一つで
あることを目に見える形で表し
てくださいました。衷心より感謝
を申し上げます。同時に、わたし
たちが今後ますます心と力を合
わせて、教区という一つの教会を
表していくことができますよう
にと願っております。どうぞ宜し
くお願い致します。
司教紋章にわたくしは「光の子

として歩もう」という言葉を選び
ました。信仰の恵みと入信の秘跡
によってわたしたちは皆、主に結
ばれて光の子となりました。わた
したちは今すでに光の子なので
す。この輝かしい身分を自覚して
喜びのうちに歩むことがそのま
ま、わたしたちは教会（神によっ
て呼び集めていただいたもの）で
あるということを表す「しるし」
となりますし、教会がこの社会の
中にあることの意味の表れとも
なると思います、この言葉を選んだの
でした。いま始まったこの新しい
年に、わたしたち教会が神の独り
子によってもたらされた救いの
目に見える「しるし」となるよう
に、やみをも貫いて照らし導いて
くださる主に信頼し、感謝と祈り
をささげながら、そして光の子ら
の交わりをもっともつと深める
ことを目指しながら、手を携えて
歩んで行きたいと思えます。

世へのしるしである光の子ら

「旅する教会は、その性質上、
宣教者である」と言われます（第
二バチカン公会議「教会の宣教活
動に関する教令」2項）。わたし
たちは、父である神が世の救いの
ために御子を送ってください、そ
の御子はご自分のもとにわたし
たちを呼び集め、さらにわたし
たちに聖霊を注ぎ強めて、救いの喜
びを知らせる宣教者として世に
遣わしてくださいと知ってい
ます。ただ、宣教とか使命とかと
聞くと、その重厚そうな響きから、
聖書もよくわからないしどうや
ればいいかわからない、とても
宣教など分ではないと尻込みし
たくなるというのが大方のこ
ろだったのではないしょうか。

れほどわたしたちを愛してくださ
るか、考えなさい。それは、わた
したちが神の子と呼ばれるほどで、
事実また、そのとおりです（1ヨ
ハネ3:1）と呼びかけています。
宣教の使命ということに重荷のよ
うに感じるという方は、わたしは
ちが皆このような身分にしてい
たのだという信仰の事実を見
つめなおし、それを味わってみる
ことから始めてみましょう。きつ
とそこから喜びと主への感謝と光
の子として歩む力が湧いてきま
す。こうして、主の力ある業がわ
たしたちを通して表れるのを喜ん
で受け止める姿勢が整えられ、そ
れはとりもなおさず「しるし」に
なるという宣教の業へとつながっ
ていきます。

毎日の生活の中で

では、具体的にはどうということ
に表れるでしょうか。『教会の宣
教活動に関する教令』は次のよう
に教えています。

「キリスト教的愛は、人種や社
会的地位、宗教とは無関係に、
すべての人に向けられていて、
いかなる利得も感謝も期待して
はいない。神が無報酬の愛をも
つてわれわれを愛したように、
信者も神が人を探し求めたのと
同じ動機によって人を愛しつつ、

自分の愛をもって人の上に心を配らなければならない。したがって、キリストが神の国の到来のしるしとしてすべての煩いと病気をいやしつつ、すべての町や村をめぐったように、教会もまた、その子らを通してあらゆる身分の人々、特に貧しい人々や苦しんでいる人々と結ばれ、かれらのために喜んでつくすのである。事実、教会はかれらとともに喜びと悲しみを分かち合い、生活のあこがれと迷いを知り、死の苦しみにあえく人々に同情する。平和を求めめる者には、福音による平和と光明をもたらしつつ、兄弟的対話をもって答えようと切望する(12項)。

これはルカ福音書10章の善いサマリア人の話と同じこととも言えるでしょう。どのような人にも隣人になっていくということ。聖パウロの勧める「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい(ローマ12・15)」ということでもあります。また同じく聖パウロが霊の結ぶ実として挙げる「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制(ガラテヤ5・22)」。も思い浮かびますが、これら全部を心掛けるとすれば最初からお手上げともなりますから、この中の一つでいいと思います。例えば「親切」。光の子は

どのような人にも親切であるというモットーはどうでしょうか。どのような人にもということですから、人種や国籍や宗教にも関わらず、また、教会では知り合っていない間でも初めての人にも、家族の中でも学校でも職場でも、歩いているときもバスに乗っているときも、病気の人も見舞う人も、こうして「いつでも光の子はどのような人にも親切である」ということは、大人も子どもも心掛けることができるのではないのでしょうか。

光の源と結ばれているために

わたしたちは驚くべき光の中へと招き入れられた光の子です。一方、光の子であるのは光そのものの、光の源に結ばれていてこそであるとも言えます。司教紋章に選んだ言葉はエフェソ書5章からのもですが、わたくしはその第10節も大切であると思いました。「何が主に喜ばれるかを吟味しながら」ということです。使徒ヨハネは「わたしたちが、神との交わりを持っていくと言いつつながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行なうてはけません(1ヨハネ1・6)」と記していますから、そのようなことも確かに起こり得る

のでしよう。人はどんなときにもあれかこれが取捨選択して生きていくわけですが、何を基準としてそうするのでしょうか。わたしたち光の子として歩む者にとつての判断基準は、いつも光の源と結ばれているように、その主に喜んでいただけることを第一とする以外にないのではないのでしょうか。

何が主に喜ばれることかを吟味するには、その前に、主のお心はどのようなものであるかを分かっているなければなりません。そのためには頭と心と体を全部使って取り組むのがよい、と言ったら分かりやすいかと思えます。

頭を使って…神のことは大切にし、聖書に親しむことです。

わたしたちの支えとなる神のことは読み、それを通して語りかけてくださる神の言葉に耳を傾けましょう。独りのときも、何人が集まったときも、できるだけ聖書を開き、聖書のことばを中心に置くことができたらいいと思います。心を使って…心からの祈りを唱えることです。独りのときも何人かでのときも、祈りは口先だけでなく、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして(マタイ22・37)」捧げる祈りしたいと思います。

体を使って…典礼を大切に、できるだけ体をもって、すなわち行動的に参加することです。

典礼と共に参加して神のこゝとばを体で聞き、力をこめて心からの祈りを共に唱え、主に喜ばれるものとなるようにわたしたちの全部を奉獻したいと思います。

終わりに

さて、小教区単独であったり複数の教会合同だったりでしたが、昨年は教区内13ヶ所で堅信式がありました。そして心強いことに多くの教会で司祭召命を願う祈りが捧げられていました。現今の仙台教区の課題として司祭数の減少という問題があります。そこで皆様に、司祭召命が増えるようにとの教区挙げての一層の動きを起すこともお願いしたいと思います。そしてこれも、わたしたち自身が光の子であることを喜んでいくという現実にも立つての動きであるならば、必ず豊かな実りを見ることが出来るでしょう。

昨秋仙台で、教区司祭召命の黙想会が開かれ、3名の青年たちの参加がありました。このような企画はこれからも続けられると思いますが、青少年が自らを主と教会に奉獻しようとする決意は、彼らを支える教会(光の子らの集い)

が喜びに溢れていることになってますます堅固なものとなって行くはずですよ。

もう一つ書き加えたいことがあります。日本の教会の大きな喜びとして、今年中にはペトロ岐部神父をはじめとする百八十八殉教者の列福式が行われる予定です。その良い準備のために、2月4日からの8日間を「殉教者を想い、ともに祈る週間」とすると定められました。殉教者こそ主と結ばれた光の子として生涯をささげた方々と言えますが、信仰をもって生きていくための大きな示唆を受けることができると思います。わたしたちも心してこの列福式に向かいましょう。

終わりに、仙台教区の皆様方お一人おひとりの上に、「わたしたちすべてのためにその御子をさえ惜しまず死に渡された方(ローマ8・32)」からの豊かな祝福をお祈りいたします。

2007年1月1日



本彫で立体的に作られた平賀司教の紋章。カテドラル聖堂入り口に設置されています。

仙台教区4名の司祭金祝

2006年に司祭叙階50周年を迎えた司祭の祝賀ミサと、祝賀会が12月4日(月)仙台教区司祭評議会の主催で行われた。

午前11時から元寺小路教会大聖堂で平賀徹夫司教主司式のもと教区司祭団の共同司式で祝賀ミサが行われた。

金祝を迎えた司祭は、川井啓師、アンドレ・レウエイ工師、土井文雄師、鷹鷲達衛師の4人。

説教のなかで、平賀司教が一人ひとり紹介すると、参列者から大きな拍手が送られた。

「4人の司祭が叙階されたのは、1956年。その後教会は、



第二バチカン公会議を経て大きな

変革を遂げました。教会の現代化には、多くの困難と苦勞を伴いました。4人の神父さんたちは、そうした困難の中を、神様に忠実に

従って乗り越えて今日に至っています。本堂にご苦勞様でした」と50年の苦勞をねぎらった。ミサの後、司祭団は、会場を移して祝賀会を行った。

洗者ヨハネ 川井啓師 1925年10月10日生(81歳)

1925年11月1日洗礼 1956年6月10日叙階(ケベック)古川・西仙台各教会の主任・曙星園施設長などを歴任。現在古川協力司祭。

アンドレ・レウエイ工師 1930年6月24日生・同日洗礼(76歳)1956年7月1日叙階

1971年から三沢教会主任ひとすじ。1995年、勲6等単光旭日賞受賞。

ヨゼフ 土井文雄師 1929年2月6日生・同日洗礼(77歳)1956年12月20日叙階(元寺小路)津谷・豊屋・元寺小路・大船渡・八戸塩町各教会の主任・司教総代理などを歴任。現在大湊教会主任。

ミカエル 鷹鷲達衛師 1928年4月12日生(78歳)1940年12月24日洗礼1956年12月22日叙階(口マ)巨理・八戸鮫・五戸・一関・千厩・大湊各教会の主任・司教総代理・教区管理者などを歴任し、現在「司祭の家」管理者。

典礼の霊性を深める

司教神学顧問 佐々木 博

「交わりと一致の霊性」

典礼は個人的な信心業とは本質的に異なっています。典礼はすべて信仰共同体の行為であるので、共同体の頭(かしら)であるキリストのもとに共に集ることが、本質的な有り様です。したがって、典礼が相応しく実践されるために、すでに共同体が、基本的に形成されていなければなりません。と同時に、典礼によってこそ、この共同体は生かされ、成長できるのです。

そもそも、わたしたちの信仰は、共同体の中で育てられ、また同時に共同体をも育てる相互関係に支えられているのです。典礼は、本質的に神とわたしたちとの交わりに基づく、お互い同士の交わりなのです。イエスは、絶えず天の御父に祈っておられます。「わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです」と(ヨハネ17・22b・23a)。ですから

個人主義的な信心は、典礼には全く相応しくありません。ですから、典礼こそ真の交わりと一致を生み出していく原動力です。従って共同体の中に残っている対立、分裂、不一致を取り除くことが、典礼以前の基本的課題です。また、この課題をクリアできるのは、「交わりと一致の霊」である聖霊の働きがあるからです。



司教日程

- 1 1 神の母聖マリア10時元寺
- 7 主の公現 元寺
- 9 司祭評議会司祭団役員会
- 14 北仙台教会 堅信
- 20 宣教師協議会役員会
- 22 人権を考える委員会
- 29 司教団日例会
- 2 11 教区神学化研修会 若手層
- 12 教区神学化研修会 福島層
- 18 教区神学化研修会 宮城層
- 19 23 司教総会
- 27 桜の聖母学園 福島市

塩と光

「愛は神からである」(1ヨハネ4・7)新しい年の初めに、神の愛が、今年もさらに豊かに、特に病んでいる

人たちに注がれることを祈りたいです。心に傷を受けているために、精神的に情緒不安定になり、辛い心の中に閉じこめられている兄弟姉妹に関わる機会が、最近増えていきます。ですから、今年こそ神の愛によって、心のすべての傷がすっかりいやされ解放されることを、心から願いたいです。わたしたちは、神に愛されたからこそ世に生まれて来たのです。だから、人は皆、神の子なのです。「あなたは存在するすべてのものを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはずべてをいとしまれる」(知恵の書11・24・25)。この祈りこそ、新春に最も相応しい願いです。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべてのことばによって生きる」(申命記8・3)。今年また、命のことばをいっぱい食べさせてください。たとえどんなに苦しいことが立ちほだかっけていても、みことばの力で必ず乗り越えて行けるのです。(博)

司祭評議会とは・・・

仙台教区の司祭役割分担の中に種々の会や活動がある。それぞれどのような役割があり、どんな働きをしているのかについて、担当する司祭の方に解説していただくことにした。今回は司祭評議会について事務局長和野信彦師に解説していただいた。

司祭評議会は、教会法(第495条)により各教区に設置することが定められている組織であり、教区司教を会長とし、教区内に居住するすべての司祭からの代表で構成される、教区司教の諮問機関です。

それは、教区統治において司教を助けるといふ責務を負い(第495条)、教区の種々の事柄について検討し、具体的な方策

神の愛と

そのみ手の中に生きて



聖ドミニコ修道会 川上ワカ
最初の神様との
出会いは、この
世の儂さから永
遠に存在するも
のを求め続け、ついに神の存在を見出し、神の子として生き、その生き方で神の存在を示した一人の女性との出会いである。神のみ手はその方を通して私の上に働き、その存在を知り、めぐみを頂き、教会の門が開かれたのである。
修道会に入会までの間、洗

を探索して
教区司教を
補佐するこ
と、および教
区内で働く
司祭が一致
し協調して
いくことを
実現するために、相互養成を図ることなどを目的としていま

平賀司教は着座の後、司祭評議会を設置し、委員は職務上として佐藤守也師(司教総代理)、和野信彦師(教区事務局長・教区会計)。司祭団自身からの選出により、首藤正義師、渡辺彰宏師、板垣勤師、氏家和仁師、

礼の神父様によって霊的講話、聖書、その他の霊的生活に恵まれた環境のなかで、さまざまの出会いがあり、信仰生活も幅広くなったように思う。
近くにドミニコ会の池尻教

招きにごたえて



会と駒場の女子修道院があり、ドミニコ会士・ドミニコ会修道女の生き生きとした姿のうちに、聖ドミニコが常に今の世界に目を向け、その人々と共に共感し生きていた姿がそ

今後、仙台教区で働く司祭団が司教を支え共に歩むために、さらなる一致と協力を推進してまいりたいと思います。

教区と修道女の

関わりを深める

仙台教区修道女連盟研修会

2006年度仙台教区修道女連盟研修会は、「教区と修道女の関わりを深める」をテーマに11月18日(土)、北仙台教会信徒会館で開催されました。写真。



会しました。

晩秋の一日、仙台教区の修道女75名が参加。教区の一員として、どのように関わり、神の希望を果たしていくべきかについて平賀司教様から示唆に富んだ講演をお聞きました。その後、聖堂で司教様司式のミサにあずかり、召命の恵みに感謝しつつ、世界平和のため、教会と仙台教区のために祈り、最近帰天された神父様とシスターのためにもお祈りをささげました。

司教様との交流を契機に、さらに司祭団との交流へと輪を広げ、仙台教区の活性化の第一歩として、仙台教区においてより実りある司牧宣教の発展に、修道女連盟としての活動が意義あるものになるよう努めていきたいと思えます。

(Sr.門間鈴子)

の方々に感じられ、ドミニコ会に引かれ今があると思う。
立誓願後50年、同期の8人と共に神様から頂いた賜物をそれぞれに活かしながら、神の愛と恵みのうちに、神のほからは限りなく生涯私はそのなかに生きる「この言葉をかみしめたいものである。」

午後からは、グループ別に話し合い、その後司教様と有意義な意見交換をして終了しました。
実り多い研修会となったことに参加者一同感謝の中に散



「聖霊に満たされ力強く歩もう」 第29回 聖霊による刷新東北大会

10月13日、15日の3日間、仙台市太白区の茂庭荘において聖霊刷新東北大会が開催され、信徒、修道女、司祭合わせて70名程が参加した。

「聖霊に満たされ力強く歩もう」をテーマに、エフエソ5章8節（「光の子」として生活しなさい。）を副題として赤波江謙一（あかばえけんいち）神父（聖パウロ会）が講話と指導をしてくださった。

「私たちが、聖霊来て下さい、満たして下さい、強めてください、と祈るのは何のためか」と話題を投げかけ「それはキリストに至るため、キリストを証するためです」と確認された。そして、使徒言行録4章24



節以下を引用され、恐れと不安で臆病になっていた使徒たちが聖霊に満たされて大胆にキリストを証しする者に変えられていく姿を話してくださいました。また、10月はロザリオの月というところで、ロザリオの祈りはマリア様の目、マリア様の思いを通してマリア様と共にキリストに至る祈りであること、4つの神秘の黙想はマリア様と御子キリストが御父のご計画 驚きや悲しみ苦しみを 受け入れて大きな喜びに達することを教えてくださった。私たちの日常生活の中でも常に起こる矛盾や受け入れがたい事を御旨のままにと言えようになりたいものと分かち合

った。この大会中、平賀司教様の司式によるミサがあり、聞き慣れた式文の祈りだけれど司教様はとてもゆつくりと確信に満ちて一言一言祈られ、私たちの心の奥底まで響き、とても感動的だった。ミサの祈りは何一つ無駄なものはなく、司祭の祈りとそれに合わせる信徒の応答や祈りは全てを与えつくされ

た主キリストの愛とひとつになり、大きな恵みとなって私たちに与えられていると感じた。まさにミサでの一つ一つの応答や祈りは、私たちの全てを賭けたものでなければならぬのだと思いを新たにしました。（秋田市土崎教会 保坂 慶子）

「光ヶ丘スペルマン病院」（志村早苗院長）を明るく光で囲み、闘病生活をしている患者さん方の心を慰めようとクリスマスイルミネーションが点灯された。



イルミネーションを企画し設置したのは、「春風の家」（旧ホスピス設置を願う会・代表 小野敬子で、病院側の協力を得て12月2日（土）午後6時点灯式が行われた。

**スペルマン病院に
クリスマスイルミネーション
闘病生活を慰める光に**

加者達は、隣の東仙台教会の方々が作

入院中の患者さんやそのご家族、病院関係者、「春風の家」関係者など60人ほどが病院玄関前の広場に集まり、クリスマスソングを歌い、氏家利和神父が祈りをささげ、イルミネーションを祝福した。病院の事務局長 畠山敬一さんがサンタク

った温かい芋の子汁で身体を温め、心身ともに温かいひときを過ごした。「イルミネーションの設置を企画し工事に会社に見積りを取って見たら、とても手が出せない金額で一時はあきらめようかと思っただけ、私たちの考え

ていた予算内で工事をしてくださる会社が見つかり、願いがかないました。この光が、病院の方々はもちろんだ、この病院の前を通る方々、苦しみや悲しみの中にいる人びとにとつて温かい慰めの光になってほしい」と小野敬子さんは語る。

また、点灯式に先立って、同日午後1時30分から東仙台教会で「一足お先にクリスマス」と題した「春風の家」主催のイベントが行われ、参加した200人ほどが、歌手の後藤優子さんのコンサートと川野目亭南天さん、今野家東さんの民話寄席で楽しい時をすごした。今野家東さんは、「実は私もクリスマスチャンなんですけど、教会で寄席をやったのは初めてです」と恐縮し、後ろの十字架を振り返って「どうもご無礼申し上げます」と挨拶し笑いを誘った。写真左

イルミネーションは12月31日までの毎日、午後4時30分から11時まで点灯された。



～ 感謝のうちに！ 創立50周年 ～

「育てよう つなげよう 白百合の心」

盛岡白百合学園小学校創立50周年

私たちの小学校は、昨

年創立50周年を迎えました。昭和31年「幼・小・中・高」の学園四姉妹として

は最後に盛岡市中央通に誕生し、昭和57年には現在の山岸に移転しました。

岩手県唯一の私立のカトリックの小学校として、卒業生は一〇〇〇名を越えています。

10月28日(土)、保護者や多くのお客様をお迎えして、平賀司教様の主司式による記念ミサ、

続いて記念式を行い、神と人との喜びと感謝を捧げることが出来ました。歴史の節目に居合わせた子供達の思い出となるよう、また教育の場



になるようにと、子供中心の行事に

することを心掛け、司教様も子供達に向けたお話をしていた頂きました。

半世紀のあゆみには多くの困難がありました。特に最近の少子化に伴う児童数の減少は大きな試練です。幸い保護者の皆様、学園を大切に思っ

たださる方々のお力添えをいただき、記念の時を迎えることができました。神の働きは、私たちのような小さいもの、弱いものを通して現れることを実感しています。

福音を伝える場としては、「自分から 友だちになる 白百合生」を育てることを目標に、人をつくる神の業に協力していく決意を新たにしています。

(校長 関谷 秀雄)

東北カトリック学園 海の星幼稚園

「ホットな創立50周年記念式典・祝賀会を終えてほっと！」

岩手県大船渡市にある海の星幼稚園は、昨年創立50周年を迎えた。

平成18年の年が明けけるや、「創立50周年の記念行事をどのように行うか？」と職員会議

を増やし、「身の丈にあった内容にするには出来るだけ手作り」を念頭に置き、土曜休日や夏休みを返上して準備に取り組んだ。秋になると平成19年度園児募集の作業と重複することから、平行して50周年事業の仕事を進めた。慣れない大仕事に日にちが迫ってくるにつれ、やらなければならぬことが山積みとなり、職員一同、頭がパニック状態!! 極めつけは、肝心要の園長(横島健二師)が、「いよいよ今週末は記念式典!」と緊張も最高潮に達した月曜日:出張先の仙台にて体調を崩し、「肺炎」と診断され、即入院となつてしまった。その情報に、皆真つ青:「ええっ!!」「式典はどうなるの!」「そんなバカな」窮地の叫び声が並んだ。困惑に陥っていたとき:なんと天からの助けの電話。学園本部の会津神父様



が園長代行としてお出でになるとの朗報。会津神父様には前日にお出でいただき、十分に打ち合わせて安心して本番を迎えることが出来た。

11月3日、文化の日。予想を裏切らない好天のもと、参加者70名余の小さなまりとした式典・祝賀会を無事終えることが出来た。大船渡市長、岩手県幼稚園連合会長、司教様、ベトレム会地区長代理の神父様など、大事な方々にご参列をいただき、貴重なお話を頂いた。

青森藤幼稚園

1955年(昭和30年)地域の方々の要望により誕生した当園は、殉教者ゲオルギオのフランシスコ修道会が幼稚園を創立、翌年、藤学園に経営が委ねられ、以来、半世紀幼児教育に力を注いでまいりました。

2006年10月27日、青森本町教会主任司祭の小松



史朗神父様司式により、感謝の祈りをささげることが出来ました。

当日は、仙台教区の平賀徹夫司教様、神父様方、幼稚園関係の方、園児とご父母、卒園生等いろいろな方々と喜びを共にしていただきましたことは、大変嬉しいことでした。これもひとえに、神様の「保護と、多くの方々のご理解、ご支援のお蔭に他なりません。

平賀司教様にいただいた祝辞にありましたように、「今日50年を迎えられたのは、50年から神様が前もって準備し、力強く支えてくださった事、全ての人は神の慈しみの手の中にあり、生かされ、そのいのちにあずかる。喜び信じた人は、互いに受け入れあう」ということを再確認する機会となりました。

激変する社会情勢の中で、職員と共に、神様の慈しみ深い愛・いただいた命を自他ともに大切にすること・互いに相手の人を大切にすること・思いやる心が平和につながることを、伝え続けていく所存です。

今後ともよろしくお願ひします。

(園長 猪股千鶴)

藤沢町民劇場「森に消えた十字架」 仙台公演：2月17日 宮城県民会館



宮城県登米市米川教会の巡回教会となつて、いる大籠教会は若手県東磐井郡藤沢町にあります。

この藤沢町の方々は自分たちの郷土の歴史を伝えようと全国でも珍しい町民による劇団を創設し、最初の演劇として2000年2月、郷土の歴史の中で重要な位置を占めるキリシタン弾圧・殉教をモチーフに制作された「森に消えた十字架」という演劇を上演いたしました。

その後地元藤沢町ばかりでなく東京、盛岡でも上演されたが、仙台ではその機会がなかつたといふことを、この演劇の脚本を手がけられた藤沢町の皆川洋一氏よりお聞きしたことから、今回の仙台公演の運びとなりました。農閑期の冬の間、藤沢町の子供から年配者まで一丸となつて稽古に励み、信仰の道を守り抜いた大籠の先人たちの生涯を演じてくださるこのことです。

宮城と岩手の奥地で名前を残すこともなく崇高な生涯を全うした多くの人々そして心に深い傷を負つた多くの人々。ともすれば美談だけに終わつてしまふ「殉教」を、「弾圧を加えた側」にスポットを当て、多くの民を処刑して平気な人間はいないとの確信のもとペンを走らせた、皆川氏。

信者の方々ばかりでなく、多くの一般市民の方々にも是非観

ロコス研究所講演会 講師 晴佐久昌英神父 「日常生活における信仰～若者と共に考える」

晴佐久神父様(東京教区・高円寺教会主任司祭)が青年のために来仙講演!就職や結婚など人生を決めるとき、イエスと共に考えてみませんか?
入場無料。一般の方も参加できます。
日時 07年2月12日(月) 13時半。開場13時。
場所 北仙台教会聖堂。公共交通機関をご利用下さい。
問合せ 御供 真人 (電話)076-5626-7018 mt_lpoonsugi@otnai.com

日時 2007年2月17日(土) 開演 午後2時 終演 午後4時
場所 宮城県民会館 大ホール
入場料 1,500円 全席自由
主催 「森に消えた十字架」 仙台公演実行委員会
後援 藤沢町民劇場実行委員会 カトリック仙台司教区 カトリック宮城県信徒連絡協議会 カトリック仙塩地区代表者同会議 カトリック仙塩地区連合婦人会あけの星会 カトリック仙台壮年の会

いのちに寄り添って 赤井聖子さん講演会

12月3日、教会の暦では新年に当たる待降節第1主日に、光ヶ丘スベルマン病院ホスピス病棟看護師である赤井聖子さんの講演会が、JCN A(日本カトリック看護協会)仙台支部の主催、JCM A(日本カトリック医師会)仙台支部後援で、元寺小路教会信徒ホールで開催された。テーマは「いのちに寄り添って」。



「いのちに寄り添って」と表現する。ホスピスケアに携わる看護師に求められていることの第1は、「聴く」と。これには、心を傾けて聴くこと、心で聴くこと、心から受け入れること、心を込めて聴くことが含まれると言ふ。

「レット・イット・ビー」の歌詞を映し出し、聖母の「なれかし」のように、神のはからいに導かれて今日まで歩んできたということから話し始めた。

ホスピスとは、患者もその家族もケアの対象であり、そのホスピスケアは、いのちが終わることから始まる、死が近くにあつても、その人にとって人間性を回復し、最高に健康的に生きることを、希望の光を見いだすことができるのだ、と体験を通しての事例を挙げながら熱心に話した。

ホスピスが始まった当初は、治療や延命が至上目標とされている日本社会の中で、「ホスピスは死ぬために行くところ」という理解しかなかった。しかし、今は次第に理解が得られるようになっていけると言ふ。

700人以上のケアに携わつたことを、赤井さんは「いのちに寄り添う」と表現する。ホスピスケアに携わる看護師に求められていることの第1は、「聴く」と。これには、心を傾けて聴くこと、心で聴くこと、心から受け入れること、心を込めて聴くことが含まれると言ふ。

ホスピスで、その人らしさを取り戻し、最期まで、その人らしく生きた人の、最期の言葉を紹介しながら、拍手の内に、講演会が終わつた。

信徒の看護師さんから勧められて来たという青年や、学校に講演会のお知らせが貼つてあつたので来たという看護学生など、出席者に感銘を与えて散会した。

活動紹介

野田町教会

「エマウス」編集委員会

『聖体の年記念号』発行

野田町教会では、「聖体の年」(2004年10月10日〜2005年10月23日)を記念して、「聖体」をテーマに「エマウス2号」の編集に取り組んだ。主任司祭をはじめ信徒から聖体に関する信仰体験や知見を投稿していただき、昨年のご復活祭にA4判・75ページにまとめ発刊した。

私の気分転換

白河教会 川井田 元

ここ4、5年介護をしていて母が昨年3月、93歳で帰天したこともあり、昨年の5月ごろから月に1週間程、信州

信濃富士見町にある高森草庵に座禅と百姓をしに12時間かけて通っている。そこは私の心の古里なのである。私が20代前半、人生に挫折していた時、私を暖かく受け入れて癒し、そして送り出してくれた所なのである。その時の住職ドミニコ会の押田神父は、

「昨年帰天し、今は一人のシスターが留守を守っているが、押田神父亡き後も訪問者

これによって信徒の皆さんと「誌上分かち合い」が実現した。

(編集長 松本幸治)



若林宏道さん トマス神父 松本幸治 (監修) (主任司祭) (編集長)

修道院紹介

無原罪聖母宣教女会

会津若松修道院

「うちの共同体について何を紹介したいの」と姉妹たちに聞きましたら、即、明るい共同体」という答えが返ってきました。年にもかかわらず、いや年をとつたからこそその明るさなのでしよう、お互いに感謝している日々です。

創立者は、国籍を越えてひとつの心で救いの喜びを伝える使命を私たちに委ねてくださいました。2人のフィリピン人



日本人3人、昨年からコングレガシオン・ド・ノートルダムムのシスターも加わって6人の共同体で、幼稚園から高校までの学校使徒職(ザベリオ学園)を預かっています。父なる神さまはすべての人を愛し、一人ひとりがかけがえのない存在である

新刊案内

『自分を知り 神を知る』

著者 カルロ・マリア・マルティニ / 訳者 松本紘一 / 発行女子パウロ会 / 定価 1300円+税

(Sr. 高橋興子)

訃報



スール・セリン
ヌ・ドウ・マリ
原口 ミツエ
シャルトル聖パウロ修道女会 盛岡修道院

2006年10月22日 脳出血のため帰天 享年83

東京大神学校の調理係、本会各支部にて院内の仕事等に献身。



スール・テレジア
松森 英子
聖ウルスラ修道会 田面木修道院

2006年12月4日 帰天 享年83

八戸と仙台の聖ウルスラ学院で小学校教師・校長として長年勤め、優しい人柄は児童や父母に慕われていた。



本書は、カルロ・マリア・マルティニ枢機卿が、ミラノの若い神学生たちになされた四旬節黙想会の講話内容です。聖書学者として著名なマルティニ枢機卿は、ミラノの大司教として活躍なさっていました。現在は引退し、エルサレムの聖書研究所にいらつしやる枢機卿様です。
教皇ベネディクト16世は、就任まもなく、教会の宝である「レクティオ・ディビナ」によって、み言葉を味わい、生きるようにと私たちすべての神の民に勧められました。が、本書は、まさにその「レクティオ・ディビナ」の方法を神学生たちに紹介しながら、「自分を知り、神を知る」というテーマで黙想指導なさっているものです。ここでは、四旬節第2週の水曜日(金曜日)の聖書のほか、ルカやマルコ、使徒言行録などが取り上げられています。どうすれば黙想できるのか、どう祈ればよいのか、という疑問を抱えておられる方がいらつしやると思いますが、そういう方々には、この黙想書は、その希望をかなえてくれるでしょう。
松本紘一師の翻訳によって、本書は読みやすく、親しみやすいものになっています。